

言語発達のための感覚訓練

ラスマン “聾幼児のための言語” より

東京教育大学 佐 藤 則 之

教師や両親は、その子どもの年令を考えつつ、同年輩の普通の子どもができることや、筋肉運動の調整や注意力の長さなどについて、それぞれの子どもに最善と思われる感覚訓練をやらなければならない。教師も親もともに、感覚訓練プログラムの各分野で子どものわがが上達するように目指さなければならない。子どもが遊んだり、物を作る活動をしている時や、感覚訓練材料で自由遊びをしている時に、子どもを観察して、子どもの特殊才能や嗜好を知るであろう。——その子どもが、色・形・その他の要素でもっとも興味を持つかどうかを知ることによって、その子どもを興味のあることからそうでない方へ、また、単純なことからやや複雑な方へと導くであろう。

視 覚

A. マチング (物の一致)

(1) 物の一致

- a. すべての点で同一である物の一致
- b. 大きさの違う物の一致
- c. 色の違う物の一致
- d. 大きさと色の違う物の一致
- e. 触覚を利用して (以上のどれについても) 物の一致

ふつう物の一致をやらすことが最初に来るというわけは、子どもというものは、持ったり操ったりすることができる物に非常に興味を持つ傾向があるからである。一番簡単な練習は、あらゆる点で同一である二つの物体を一致さすことにはじまる。二つのはっきりした色彩の青いボールと、二つのはっきりした色彩の赤い玩具の飛行機が使用されるとよい。あるいは、子どもが興味を持ちそうな一對の他の物体が使用されるとよい。

色で混乱しそうな子どもには、大人は、すべての点で同色の物体を用いたらよい。即ち、最初の練習に用いられる物体は皆、青一色であることが望ましく、それに続いては赤い他の一組の物体が用いられることが好ましい。そうして、そういうぐあいにして続けていけば、子どもは、ついに色や色のついた物体について、ずっと経験を積むことになる。

このことの第一の目的は、その子どもが、物を一致させることを学習することであって、たいていの場合、同じ色は、子どもが対の物体を早く一致させるのに役立つ。

練習が、最初あるいは最初のほんの数回、行なわれるだけでも、子どもは、その物体に触れたがったり、それをころがしたり押したり、あるいはそれをなめたりさえするものである。もしも子どもが、遊びの場で、類似物についての経験を持つと、子どもは、それらの類似物を、経験する時を過ごすことをあきらめることが起るかもしれない。その材料が子どもにとって非常に目新しい時には、両親や教師は、子どもが調べたり経験したりする欲

望に添うように心がけなければならない。

大人は、子どもの近くの場所（それは床の上であったり、テーブルの上であったりすると思うが）に、一つのボールと一つの飛行機を置く。そうして、それと類似の物を、自分の膝の上に置く。そして、そのボールを膝から取って、持ち上げていう。「これはボールですよ。ジョーちゃん、ボールよ。もう一つのボールを取ってちょうだい。」と。

子どもは、他のボールを取り上げるかもわからないし、あるいはまた飛行機を選ぶかもわからない。もしも子どもが後者を取ったら（こういうことがよくあることなんだが）、教師は、他のボールを示したり持ち上げたりして、自分が要求している物を子どもに示してやる。そうして、ボールを二つとも一緒に置いて、「これはボールですよ。また、これもボールですよ。」という。同じようなことが、飛行機についても学習されることが好ましい。

ジョニーは、しばらくの間は注目しないかもしれない。そうして、最初は、話し手よりもむしろ物に目も注ぐかもしれない。大人は、この反応に応じなければならず、またそのことを、子どもがする自然のこととして受け入れなければならない。けっきょく、2、3才児は、もしもただ手で扱うだけなら、玩具をどうしたらよいかということを理解できる。しかし、なぜ大人に注目しなければならないかということとはわからない。さらに、この段階では、物を一致させることを学ぶことが、一番大切なことである。

練習は、くり返えされるとよい。そうして第二のくわでは、ジョニーが正しい物を、大人に手渡すということになったらよい。練習に用いられる同一物の数は、その子どもが、マッチングの概念で把握できるように進められる。まもなく、形だけが違う物がとり扱われる。二つのボール、その一つは大きくて他は小さいもの、二つの飛行機、それも一つは大きくて他は小さいもの、二つの靴、一つは大きくて他は小さいもの、そうして、他の同じような身の廻り品が、同一物認定の材料として、同一のやり方でとり扱われることになるであろう。

何対かの物がマッチングされると、子どもは、もっともっと違った物にむかわされる。第一段階では、ただある点だけで違っている物が用いられることが好ましい。もしも二つのボールの形が違っているなら、それは、色や図柄を同じにしておく方がよく、色が違うなら、大きさを同じにしておいた方がよい。このことは4、5才児にはそう絶対的なものではないが、幼い子どもにとっては大切なことである。こういうことが、変化を容易に認めさせることになり、読唇の技術が上達するのに大に関連のある注目という、物の微妙な当違に目を注ぐことを徐々にするようにさすのである。

できることならいつでも、子どもを困らすことなしに、あるいはまた、練習を行なうのに干渉することなしに、教師や両親は、それらの物について話してやる。その物の名はたびたびくり返えされる。それが、短い、簡単な文章あるいは句として話される限り、大きなボール、赤い飛行機、あるいはボールのようなもの、あるいは単なる飛行機として述べられてもかまわない。

時として、いら立っている子どもや、ひどく過敏な、疲れた大人の好ましくない状態で、子どもの注意を引くために、非常に多過ぎる動きを述べ続けようとするときには、話しをすることを控えることが賢明である。子どもは、もしもその子どもがするように示さ

れた仕事をする機会を与えられるならば、物が示されたときに、もっともっと一貫して話し手に注目するという考えを持つであろう。

子どもが、自分と大人との間に、いい関係が作られたあと、マッチさせることに慣れてきたとき、触覚を加える方法が始められたらよい。時々、大人が物を示すとき、大人は子どもの手を大人の頬に置いて、その物について話してやる。こうすることは、話し手の顔や唇に注意をひかせる助けになり、話す準備の第一歩となるものである。これはできるだけしせんに物を持ち上げながらなされたらよい。

f. 触覚を用いて、物の名まえを読唇させる。そして、ある物を、対応する物に一致させる。

g. 触覚を用いなくて物を読唇させる。対応する物に一致させる。

h. 触覚と聴覚とを用いて物を読唇させる。対応する物に一致させる。

i. 触覚は用いなくて、聴覚だけを用いて読唇させる。対応する物に一致させる。

子どもは、偶然に、または、もっとホーマルな形で物を一致させることにいろいろ経験を重ねることを楽しみ、また、自分の手を話し手の顔に置くことによって読唇の習慣が根を下ろすことを知る。口声模倣もまたはじめられる。触覚と聴覚とが、読唇や一致の訓練と関連して学級活動の中にとり入れられる。しかし、それは、子どもが、そのような変化を受け入れ得る程度でだけだ。

大人は、一つのボールを持ち上げて、子どもの手を頬につけ、次のようにいう。「ジミーちゃん、ボールですよ。」また他のボールを指していう。「これもボールですよ。」と。それから、再び手を頬につけて、自分の持つボールについて話す。そして、「他のボールはどこにあるの？」とが、「もう一つのボールをちょうだい。」などという。もしも子どもができなければ、大人は自分の手をつき出して、「私に他のボールをちょうだい。」と、くり返していう。

物を一致させることによる読唇のためのこの初歩の準備動作は、触覚を用いたり用いなかったりして進められなければならない。触覚というものは、子どもにとって非常にぬうちのあるもので、子どもを訓練するのに大切な手段であるとはいえ、子どもはまた触覚なしに経験する必要がある。というのは、触覚の用い過ぎは、ときにかえって害をあたすという危険さもあるからである。

一致させる練習は、子どもが見ている間に、その物について話し続け、それから、子どもの耳のそばで、語や句をくり返しながらか、話し手の頬に、子どもの手をつけさせて、変えられるとよい。イヤホンが用いられるとき、それと触覚、聴覚、視覚三者を用いての方法がとられる。子どもは唇の動きを読唇するために話し手の顔に触れ、大人の話しをマイクロホンで聴く。

時としては、大人は、物を持ち、片や子どもの方は、自分のイヤホンに耳を傾け、大人は自分の口を覆い、マイクロホンの中にものをいう。子どもが聾児であるので、大人はその子に「聞く」ことを期待はしない。しかし、子どもは、話しことばの型を聞く経験を持つといい。

子どもは、大人の手の中の物を見ることができるので、多分、自分がどのくらい「聞いた」かは問題外として、ただちに物を一致させることができるであろう。しかし、練習は

なお子どもがすることのできる何かに関して耳を傾けさせるように実行させきるのに価値があるものである。

こういうさまざまな練習が用いられるたびごとに、子どもが話し手の顔全体を注目するとき話す人は、ことばをくりかえすことによって、ただちに進めてゆくべきである。

(2) 物を絵に一致させる

j. 物を絵に一致させる。(変化を加味して)

物を絵に一致させることは、画かれた物とほんとうの物との間の関係について子どもの理解を増進する。よくあることだが非常に幼い子どもが、画かれた物を書物の頁やカードからとり上げようとするのを見る。子どもはほんとうの物を取り上げるようにそれらをつまみ上げる。物を絵に一致させることは、子どもの周囲の物について、こどもがもっともっとそれをよく了解するようになる助けになる。

はじめの練習では、実物と一致する少しの物と、まったく同一の画かれた物とが必然的に使われる。あとの練習では、もっと多くの絵と物とが、物によってだんだん、色、大きさ、そうして多分輪廓が変えられてマッチさせられる。

子どもは、大きなボールを、絵に画かれた小さなボールと結ぶように、また、部屋の中の赤い椅子を、絵の中の緑の椅子と結ぶように、また人形の家の画かれた扉を、家の扉と結ぶように、また、手の中の長さ、幅、厚さのある物を、紙に画かれた平たいものと結合するように学習する。

読唇と触覚や聴覚利用という手段を用いることが、子どものレディネスによって学習の中にとり入れられる。また、それに似た様式で、物をマッチさせることをきめる。

両親は、家庭で子どもを絵や物にふれさせて、ナースリー・スクールの訓練中、子どものできるとどんな特別な訓練でも、補ってするように奨励させられる。子どもの歯ブラシ、顔拭き、石鹸、タオルなどの絵が、浴室の、これらの物の下に、ピンでとめられたり、糊で貼られたりする。衣裳箆の中の水の絵が、ひき出しまたはその近くの外側に鉤などでとめられて、子どもは、自分あるいは母が、ひき出しからとり出す衣類を絵にマッチさせることができる。食物の絵が、台所のどこかに掲げられるというような学習もする。

このような場面で、絵を物にマッチさせる練習をすればするほど、子どもは学習の場で、ずっと成功をはくするであろう。

(3) 絵を絵に一致させる

k. まったく同じ絵を一致させる。

l. 違う大きさの説明された物の絵を一致させる。

m. 色の違う物の絵を一致させる。

n. 色と形と違う絵を一致させる。

o. 細かくて、また入り込んだ絵を一致させる。

最初の絵合わせは、単純で、はっきりと明らかな、まったく同一な物で行なわれる。1枚1枚のカードに示されたただ一つの物であることが好ましい。だんだんと、子どもは、若干の物や人物が画かれている少し複雑な絵に一致させるように学ぶ。

もしも、最初の絵が、おおぜいの人や、多くの動作や、またもりたさんな説明を加えて、一致させる目的をもって幼穉児に示されると、穉児は、同一の絵を一致させるかわり

に、説明の付った物あるいは人のそれぞれを、よく調べるのに相当の時間を費やす傾向がある。あるいは、聾児は、大人がこのような絵を一致させようとしたときに、聾児に対して、かくありたいと欲することについて、まったく混乱させられる。子どもは、1日中いろんなときに、本の中に画かれた絵にふれる機会が多い。しかし、特別の訓練の場で、子どもは、系統的に、単純なことからかなり組織的に導かれる必要がある。そうして、大人が手にしている何かの絵にちょうど一致するように期待されるべきではない。

この物を一致させる練習訓練は、興味と変化とを添える若干の動作をともなうべきである。子どもは、部屋の向う側に置いてある物に対応して絵を一致させることを喜ぶものである。また、子どもは一積み絵の中から、正しい絵を探すことを喜ぶものである。あるいはまた、子どもは、箱やひき出しから、対応する絵を「探す」ことを好むものである。

(4) 絵合わせと一しよに読唇する

p. 触覚を用いて、示された物の名を読唇し、相応する絵に一致させる。

q. 触覚と聴覚とを用いて読唇し、絵に絵を一致させる。

r. 触覚や聴覚なしに読唇し、一致させる。

s. 聴覚を用いて読唇し、一致させる。

こういう一致の学習の中にとり入れられる読唇は、子どもの側に誤りを起こさせることを、ほとんど不可能にするようなものでありたい。これは、そうなくてはならないからであり、束の間の場面では大切なことである。子どもは、だんだん読唇するように導かれ、子どもが色のついた面白いそうして興味をひく物を経験し楽しむと同時に、読唇を通して無意識に言語をつかむことになる。子どもは、一時に物の名を読唇することを期待されてはならないし、また真似をされてもならない。

教師や両親が、同じ意向を仕上げる新しい異った方法を絶えず考え出すことをするためには、非常に多くの反覆くり返しが必要である。ある子どもは、他の子どもよりも、この一致させる場で、話し手に注目しなければならないということを知るまでに、ずいぶん長い時間を要する。子どもは大人の基準的な動作に注目するように無理強いされてはならないし、またそれに順応するように強いられてもいけないから、全場面は、子どもを興奮させ刺激するように、また面白おかしく作られなければならない。そうすれば、子どもは、自然に、言語発達をそく進ませようと大人によって計画された技術を受け入れるであろう。

ときどき、学習の中に「気をもませ」たり、「いぶかしがらせる」ことをとり入れると、話し手の顔に、ずっと注意するようになる。数枚の絵が卓上に置かれ、それに対応する物が大人の膝に置かれるといったぐあいにやるとよい。大人は、その一つを手にとって、ある非常に特別な絵を、子どもにかくずようなそぶりをして、いう。おどけたような表情で、しかも絵は子どもに見せないで、「ジョニー、ボールですよ。きれいなボールよ。」と。それから、す早く、その絵をちらっと見せて、テーブル上の物にマッチさせる。大人は、その他の絵も、子どもに見せる前に、それぞれについて話してやりながら、同様な手順でやっていったらよろしい。もしも、子どもが、それらをすぐにマッチさせたがるなら、そうすることもゆるしてやったらよい。

これがなされたとき、大人は子どもに、時には触角を用い、時にはそれを用いないで、

それぞれの絵についてたずねる。手伝ってやったり、時には手伝わないでも、子どもが正しい絵を選んだときには、教師や親が子どもに渡している箱の中にそれを入れさせたらよい。簡単なゲーム場面は、とくにそれがやり過ぎでなければ、注意や興味を持たせるのに非常に与って力になる。子どもは、大人がこれやあれやの動作や、「おどけた」動作でやっていく事実を、す早くとらえる。大人が子どもに、それを楽しむようにさせるのではなくて、ある他の面、即ち子どもというようなものを越えて、ゲームの本当の喜び、楽しみというものに強調を置こうと考えるので。もしも子どもが、このことをはきりつかんでしまうと、絵合わせやゲームの価値は、ほとんどなくなってしまう。困ったことに、屢々大人は、子どものこういう場の理解について早く知ることができない。そのようなゲームでは、物を一致させる学習は、ちょうど毎日毎日の仕事のように行なわれて、子どもにとってはうんざりものになってしまう。

絵合わせが、それを通して毎日何かの仕事をしなければならない子どもにとって非常にうんざりするものになり、また興味を欠くものになってきたら、大人は、ただ絵合わせが、言語発達に演ずる新しい仕方に油断なく対処しなければならないばかりでなく、また子どもを楽しませることができるようにならなければならないし、一方自分達がどんな方法を講じたらよいのかも考えなければならない。

物のあれやこれやの絵が、厚紙カード板の上の対応する絵に一致させられるロット・ゲームという遊びは、絵合わせにいろいろの変化を与えてくれる。教師や親は、市販のロット・ゲームには入っていない物の入っている手製の図表やカードを作って用いることも好ましいことである。

B. 色 彩

子どもの色彩についての興味は、色の名を読唇するように指導されたり、色について言うことができ、また日々身の廻りに美しい色を認める用意ができる前に発達させられなければならない。

幼児は部屋から部屋へ行ったり、その部屋の中で物から物に行って、自分の着物の色や、持っている大事な玩具の色に一致させたり、家具や壁や皿やカーテンなどの色に順応させたりすることを喜ぶものである。子どもは外を歩いているとき、絵本を見ているとき、またその他のときに、こういうことをすることを好む。

色の付いた玩具が利用される。どれも違った色の付いた三つ四つのコップが、子どもの前に置かれたらよろしい。色の付けられた糸の蝶形結びカリボンの蝶形結びが、同時に一つ子どもに手渡される。青い蝶形結びは赤いコップの中に入れられたらよろしい。子どもは期待されている物を示さなければならぬ。そうして、1人1人の子どもによって、多少の時間がこの実験を習得するのに要されるであろう。子どもは小さな蝶形結びには興味を持たないかも知れない。そういう場合には、大人は他の方法によって色をマッチさせる観念を得させる必要があることを知る。子どもが、もしも蝶形結びを好まないようなら、強いてそれを用いるようにすべきではない。

そういう場合は、練習は、相応する色の付いた箱の中に落すことのできる、色の付いたビーズ玉か、あるいは、色の付いた積木を用いることによって変化を与えられたらよろしい。時としては、子どもは、相応する色で塗られた罐の中へ色の付いた水を注ぐことを好

む。

もしも子どもの順応が得られるならば、ビーズは色の付いた糸に通されたらよろしい。子どもに、赤いのと、青いのと、黄色の三つのレースが与えられる。一方、選択自由の赤いのと、青いのと、黄色の三種類のビーズ玉がある。黄色いレースに黄色のビーズを、とといったぐあいに玉を通すことを教えられたらよい。

マッチ箱の上に色が塗られるか、あるいは、色紙が張られる。それから、それに相応ずる色のついた玩具の自動車が、ギャレージの中に入る自動車のように、それぞれのカバーの中にひき込まれる。あるいは、玩具の自動車や、玩具の飛行機が、床の上の色の付いたボール紙の上にひきこまれたらよい。

大人は、大きな1枚のボール紙の上に「レール」網の輪廓を付けるか、色分けをする。そうして、子どもは、電車と相応じて色の付けられている鉄道の上を、「電車をドライブさせる」遊びをすることができる。

買ってもよし、作ってもよしのパズルに備えた色の付いたボール紙がある。簡単な形のボール紙が、青で線の引かれた一つのセクションを区切る。そうして、その中に、青いのがはめ込まれる。赤で線の引かれたセクションは、パズルの赤いのはめられたらよろしい。

ある簡単な一つの物を、それぞれの地穴にさし込んだ型紙が、色をマッチさせる練習に用いられる。例えば、青いボールの切り抜きは、青い地穴と丸い切りとられたボール紙に合わせられたらよい。このとき、子どもは、色のみならず、また形もマッチさせることになる。

幸に、このような小さな型紙は、容易に作られる。というわけは、両親や教師は、平素、嬰兒に必要な反覆を与えるために、市販の簡単な物だけでは充分でないことを知るので、その物は、約4インチ角ぐらいの、1枚のベニヤ板の上に描かれたらよい。そうして、鋸で切りとられる。それから、1枚の硬いボール紙か、ベニヤ板の四角の元板にしっかりと膠で著けられる。四角も、切り抜かれたものも、ともに必要な色で塗られる。でき上ると、その切り抜きは、オリジナリーに切られた元板の中に容易にはめ込まれる。

色を一致させることを通して、大人は、子どもに、その手を用うる機会や、学んだり、動作を一点に集中したりする機会を与える。大人は、できるだけ充分に子どもに話しかけてやる。そうして、それぞれの色について話しているとき、大人に注目することをすすめる。触覚や聴覚を利用して行なう訓練方法は、絵や物を一致させていると同時に、読唇と結ばれる。

C. 形

ちょうど「色」のところでも述べたと同じ型紙が、色々の形についても、練習したり経験したりするのに用いられるといい。ボール紙によって簡単な物や形が組み立てられている型紙やパズルがまずはじめに来る。だんだん、むずかしい込み入った物が徐々にとり上げられる。この仕事を試みたある親が、自分達のそれぞれの子ども達の理解力、順応、注意力を遙かに越えるパズルを与えて失敗した。

子ども達の活動や童謡描いた、簡単なものから複雑なものに及んで分類された、多くの色の付いたパズルが市販されている。大人は、いつも、市販の物だけでは不充分なので、

それを補充する必要を感じる。パズルや型紙をうまくつかうと、感覚訓練・読唇、また言語の他の点に関して早い喜ぶべき糸口がつかめる。

色紙から導いて、カードの上に貼られた「幾何図形」はたいいていの子どもの目をひき、形とマッチさせる材料として役に立つものである。1枚の赤い色紙から、大人は、二つの四角、二つの円、二つのダイヤ型、二つの矩形、二つの三角形、二つの多角形などを切ったらよい。それぞれの型が一つ一つのカードの上に載せられる。変化を与えるために、一組の型がカードの上に、もう一組が大きな図表の上に載せられたらよい。

これらの型で十分に練習を積み、興味を持ち続けている子どもは、色が何であるにせよ、また、それが大きかろうが小さかろうが、いずれにせよ、円がお互いにマッチすることや三角形が一緒になることを学ぶ。

はじめ、二つの円が色も大きさも同一であり、三角形も同様な点で同一であり、また、同様に他の形も同じように用いられる。だんだん色が変わられると、子どもは青い三角形を紫の三角形に合わすようになってくる。ある場¹計には、場に関して矛盾したあを様相があってもよい。子どもは色を一致させるか、形を一致させるかどちらかの点で抵抗を起すかも知れない。教師や親の側の忍耐と絶えまない指導と、特有な場における色よりもむしろ形をマッチさせることを子どもに学ばすように結果づけるものである。

子どもが形を一致させることに慣れてくると、仕分けられた色や形がとり上げられるようになり、子どもは、すべての三角形を大きさや色におかまいなしに、一系列を置くようになる。一方、すべての四角を他の系列に置くようになる。

色の付いていない、自然の材木で作られた幾何図形が、形を一致させることを習うのに役に立つ。親や教師は皆、子どものために、こうい²らセットを備えてやるとよい。大人は、それをマッチングに用いられた同一物として用いたらよい。大人はその若干の物を箱に入れて子どもに与えたらよい。一方、マッチングするものを自分の膝の上に置く。その一つをとり上げ、子どもはそれに応ずる物を箱の中からさがし出す。箱の中から子どもが選ばなければならない沢山の異った形が、子どもの場についての理解や彼の注意力が許すにつれて増進させるべきである。

D. 記 憶

幼稚園の折板で作られた stick designs は、記憶を増進する方法として最適である。子どもは教師や親が2、3本の細い棒で非常に簡単なデザインを作るのを注意して見る。教師や親は、そのそうさを二、三べん繰り返す。それから、教師の作ったデザインを見せるために、子どものテーブルの上に置かれる。子どもは、そのデザインを真似て作るに必要な数本の細い棒をもらう。

もし子どもがむずかしがるなら、大人は、1本の細棒をテーブルの上に置いて、子どもにも同じことをさせる。そうして、他の細棒をはじめの細棒の側に置いて、子どもに真似させる。そういうふうにして、そのデザインを完成させる。

非常に幼い子どもは、大人が作る例を真似たがらないことがある。そういう子どもは、その細棒をテーブルの上に積んだり並べたりしたがるものである。こういうときには、大人は逆に子どもがした真似をして、模倣観念をうつしてやるように助けなければならない。

もしも子どもが、その細棒を1列に並べて置くことを好むようなら、大人は多数の赤い細棒を1列に、青い細棒を他の列に並べてやる。そうして、子どもが色の順を記憶するまで続ける。大人が細棒を扱う子どもの仕方を真似て受け続けるとき、子どもはだんだん遣りとりをうまくするようになり、ついに、細棒を用いる大人の仕方を真似てやることができるようになるであろう。

一度、子どもがある簡単なデザイン、即ち、四角、三角・ダイヤモンド型・家型・テーブル型・椅子型その他の型を真似るように学ぶと、子どもは、記憶してそのデザインを組み立てるようになる。大人は、子どもが見ているときにデザインを作る。それからデザインを変える。その結果、子どもは、どんなふうにそれが作られ、また再成されていたかを記憶するようになるであろう。時が経つと、子どもは真似から「記憶に」に移る。

いろいろの物が記憶訓練に用いられる。2、3の物はテーブルの上に特別の場所に置かれたらよい。——多分それぞれの隅に。——大人はそれらを動かし、子どもが見ているところで、もともとの場所にそれぞれ返しておく。それから物はテーブルから移される。それぞれの物は、それを適当な隅に置いた子どもに手渡されたらよい。比較的多くの練習が、子どもがこの練習を身につける前に要求される。練習に使用される多数の物とそれに対応する場所とが、記憶発達のために、子どもの才能に応じて増される。

物は子どもが注目するにつれて、部屋の中のいろんな場所に置かれたらよい。それから、それは他の場所に移され、そうして、子どもはそれぞれを本来の場所に返しておく。この記憶の訓練は、読唇や発語の準備と結ばれればよい。

物は子どもが注目するにつれて、部屋の方々に置かれたらよい。大人は対応する物を取り上げて、子どもに他のボールや飛行機などを探すように命ずる。この際、子どもの記憶は、返答の速さと正確さから量られる。ずっと後では、子どもが若干読唇ができるようになったとき、対応する物の助けなしに、かくされた物を見つけ出すように返答するようになる。

触 覚

「形」のところで述べた幾何が図形の触覚の発達をはかるのに便利である。大人は、子どもが注目しているときに、2、3のやういった固体が紙袋の中に入れる。大人は、テーブルからこれと相似た形の物を取り上げて、それに触れ、それから袋の中を見ないで袋の中に手をつっ込んで、かき廻し、テーブルからとった物とマッチする固体を取り出す。

子どもは、触れるために一つの固体を与えられる。それから手を袋の中に入れさせられる。そうして袋の中の物がテーブルの上にある物と同じ物だと感ずる物に触れるまで袋の中の固体に触れる。そしてそれを引っ張り出す。

こういう方法に用いられるはじめの形は、ただ触れることを通してマッチさせる子どもの仕事を運びよくするために、形がまったく違っている方がよいようだ。袋の中にある固体の数は、子どもの技がうまくなるにつれて、だんだん増されるとよい。

いろいろの玩具が、「掴み袋」の中に入れられ、上に述べたような方法が用いられたらよい。

触覚を発達させるためには、円筒状の板がひろく使用される。子どもが、円筒状板の対

応する穴に釘をマッチさせることを習った後、子どもは目隠しをされて、触れてこれをすることを期待される。時として、大人にとって、子どもが何が期待されているかを示すためにこの反覆を行なうことが必然である。ある子ども達は目隠しされることに異議を唱えるが、しかし、大人がその手を子どもの目の上に置くことは許すであろう。自分の目が蔽われることを強度に嫌がる子どもの場合には、こどもがそれを許す用意ができるまで、その訓練をしないようにすべきであろう。

子ども達は材料に触れ、それをマッチさせることを喜ぶものである。2枚の綿子、2枚の羊毛布、2枚の木綿の更紗、その他いろいろの材料が用意されるとよい。ひとそろいの布が興味をそそるために、一つの輪かあるいは短い細棒に縫いつけられる。ある子ども達は、洗濯ばさみで乾し網にピンでとめられた材料を持って喜ぶ。子どもは、触れたり、見たりして材料をマッチさせる機会を与えられる。子どもが、その材料を容易にこういったやり方でマッチさせるとき、練習はもっと厳密にされて、同じ材料にもっと色をつけたりデザインをして行なわれる。子どもが触れたり見たりして材料をマッチさせる能力を示しはじめたとき、若干の見本が袋の中に入れられ、大人が示した特別の材料をマッチさせるのに、ただ触れるだけで選ぶ。

子ども達はいつも、かたい物をかたい物に、軟い物を軟い物にマッチさせることを学習することを喜ぶ。多くの物や材料に触れて、子どもは、ある物は触れてかたく、あの物は軟いことを学習し、かたい物はかたい物同志、軟い物は軟物同志、グループにすることを学ぶ。軟い物やかたい物で練習することは、触れて同一物認定をすることを学ぶと同時に形容詞の読唇に役立つ。

聾児の初期の訓練の際の感覚訓練の重要性については、すでに強調した。読唇言語理解と聴能訓練とを感覚訓練活動に結びつけるように告げたが、親と教師とは、感覚訓練活動の価値は、「不適當な」（下手な）手でやると容易に無価値になるおそれがあるということをもいつも念頭に置かねならない。

子どもの努力と喜びの活動は、読唇や発語に感応する大人の要求よりももっと重要である。感覚訓練活動を行なうことを通して、幼聾児は感覚訓練がはじめられたあと数週間にして、読唇をはじめたり、発語模倣さえはじめるかも知れない。あるいは、ある子どもは、感覚訓練活動や はじめて数カ月経っても、読唇のけはいを示さないかもしれないし、あるいはまた、発語を真似ることにもなんら興味を示さないかもしれない。

もしも、子どもがそうしようと思える前に読唇を強いてやろうとする方策がとられるならば、読唇とそれの必要さのために組み合わせられる活動とをはねのけるのみならず、感覚訓練活動それ自体をも受け入れないであろう。読唇や発語はさておき、これらの活動はそれ自体甚だ重要であり、これらの技の発達のために親や教師によって心配され過ぎて、感覚技巧の発達の点で子どもを遅滞させる。そうしてそれは、順に聾児が必要とする他の技の発達をも遅らせる。